浦和レッズと次に続くビッグクラブの比較研究
Research into the club management of Urawa Reds comparing with next big club

1K06B099　　小森　隆幸
指導教員　主査　太田章先生　　副査　広瀬統一先生

【序章】

1993 年に開幕した J リーグも 17 年の間に様々な歴史を送ってきた。そして近年では、毎年優勝争いを送るチーム、中位に終わるチーム、降格ラインをうろつくチームというように戦力面の位置づけが決まり、2005 年からの情報開示により経営情報も明らかになったため、財政規模の大小も明確になった。そんな中、一つの成功を収めるクラブが現れた。浦和レッズである。戦績、財政規模ともに成功を収めるビッグクラブが J リーグにも現れた。しかし、J リーグのさらなる発展を考えると、他にも何チームか同じ規模を持ったクラブが現れる必要がある。どんな世界においても切磋琢磨するライバルの存在は、互いのレベルアップを促すために重要なものだ。そこで本研究では、さまざまな資料を用いて、まずはＪリーグのビッグクラブとなった浦和レッズの成功要因を明らかにし、さらに浦和レッズに続くビッグクラブとなり得る存在を明らかにし、それらがビッグクラブになれるかどうかを検証することを研究目的としたい。

【第１章　世界のプロリーグとＪリーグ】

今日のＪリーグは急激な発展こそないものの、地に足のついた堅実な成長を続けている。

営業収入では欧州五大リーグの数分の一程度であるが、入場料収入はそれほど大きな差はない。収入構造について、Ｊリーグは広告料収入の割合が大きいことが問題である。一方欧州リーグは放送権料が高騰しすぎていることが常に指摘されている。クラブ経営の規模の大きさは差がありすぎるが、欧州はそのぶん負債も多く抱えている。健全性を保つ経営はＪリーグの最大の美徳である。

【第２章　浦和レッズがビッグクラブとなった要因】

浦和レッズが成功した要因は大きく分けて三つに分かれる。それは土壌・演出・ドラマだと言える。まず浦和というサッカーのまちをホームタウンにできたこと。次に、地域を第一に考えたクラブによるピッチ上でのマネージメントとピッチ外でのマネージメント。そして、「Ｊリーグのお荷物」からアジアチャンピオンにまで登りつめたドラマ性である。

【第３章　次に続くビッグクラブ】

戦績においては文句なしの鹿島アントラーズとガンバ大阪だが、経営規模は浦和レッズとの間に大きな差がある。そして、その差を生みだしているのが入場料収入である。しかし、両クラブともその改善に向けてそれぞれ大きなプロジェクトに取り組んでいる。

【終章】

以上のように浦和レッズというビッグクラブが形成されてきた過程をみることでその要因を探ってきたが、その要因は「何かこれ」という一つのものではなく、たくさんの要素が複合的に絡まりあってできたものだということがわかった。また、分析の結果、鹿島アントラーズ、ガンバ大阪の２チームが浦和のような財政規模

のクラブになれるかどうかは、短いスパンで見れば正直言って難しいということがわかった。ただ、この２チームは長い目で見た経営計画を持っており、地域とサポーターを第一に考え地道に観客を増やそうと取り組んでいる。それは浦和レッズが取り組んできた「浦和の人のために」という信念と通じるものである。浦和とは都市の規模も歴史的な背景も違う２チームなので浦和の真似をすれば良いというわけではないが、地域密着というのは今やプロスポーツクラブの繁栄に欠かせないものである。その意味で将来、浦和レッズと並ぶビッグクラブとなる可能性をこの２チームは十分に秘めていると言える。いつの日かこれらのクラブが競い合いながらＪリーグを牽引してくれれば、Ｊリーグは今以上のさらなる発展を遂げるであろう。